

O1-034

ニュージーランドの特別支援学校satellite校
におけるインクルーシブ教育

波田野 希美、酒井 規夫

大阪大学医学系研究科保健学専攻

【背景・目的】

ニュージーランド(以下NZ)におけるspecial educational needs(以下SEN)をもつ子どもたちの教育を受ける環境は、通常学校と特別支援学校に大きく分けられ、その中から通常学校でのフルインクルージョンあるいはspecial unit、特別支援学校の本校あるいはsatelliteと保護者の希望に応じて選択できる。その中でも、特別支援学校に所属しつつ地域の通常学校(以下base校)の敷地内に設置されているsatellite校で行われている教育は、特別支援学校在籍者数の増加に伴い今後日本でも設置が増えてくると推察されている。本研究ではNZ国内のprimary schoolの特別支援学校satellite校でのフィールドワークを通して、特別支援学校とbase校の狭間で実践されるインクルーシブ教育について明らかにすることを目的とした。

【方法】

2016年9月～12月にかけて計18回、NZ国内のA特別支援学校のB satellite校にて参与観察を行った。それに並行して教員2名とLearning Teaching Assistant 4名を対象にインタビューを実施した。得られたデータは速やかにフィールドノートに記載し、分析を実施した。

【結果・考察】

base校と校庭や一部の施設を共有することで、休み時間にB satellite校の児童とbase校の児童が友達になる場面が観察された。その一方、satellite校という位置づけについて、A特別支援学校との繋がりは強く、学校イベント等を他のsatellite校と合同で実施している半面、base校との関係については、「今年から校長が変わり、satellite校とbase校の距離感が少し離れた」という教員の語りやターム末毎にbase校に気遣う場面も観察された。base学校と環境を部分的・物理的に共有するsatellite校は、NZの密接した地域コミュニティの中、互いの存在を認知し、子どもたちにとって友達作りの場にも繋がっていると考えられる。その一方、B satellite校はいわば間借りの状態であり、base校とそもそもその所属が異なることから、インクルージョンの程度がbase校の運営方針に依存すると推察され、大人が気遣いつつも社会での生活に向けた教育が少しずつ実施されていることが明らかになった。また、satellite校の児童の卒後の最終目標として、教員は「SENを持っていても自立あるいは社会で就職できること」「社会に出て友達をつくること」と語っており、教室内の道具の配置や作業手順にも将来の仕事を見据えた日々の教育を実施していた。